



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



平和

主任司祭 小西 広志 神父

八月は平和旬間です。少し、平和についてアッシジの聖フランシスコから学んでみましょう。

若き日、フランシスコは戦いの人、騎士となることに憧れていました。しかし、回心の後で熱烈な平和の推進者になったのです。一二世紀は世の中ばかりか教会までもが、例えば十字軍のように、暴力に頼っていた時代でした。そんな時代、最初の頃のフランシスコの活動は「平和の代表団」として人々の知られていたのです。(一チェラノ 24)。

フランシスコは、暴力は悪魔の心を喜ばせると主張し、争いに引き裂かれたアレッツォの町の悪魔を追い出しました。暴力を悪魔にとりつかれた「しるし」とみなしていたからです(二チェラノ 108 参照)。また、主が平和のあいさつを示してくださったと確信していた彼は、その著作で一番注意するよう警告した悪徳とは、自分自身と他人の内部にある平和を破壊する心、すなわち、傲慢、貪欲、不遜、虚栄、嫉妬、誹謗、そしてゆるすことのできない心でした。フランシスコは死の床にありながら、憎しみ、敵対しあうアッシジの司教と市長の二人を和解させました。フランシスコは死ぬまで平和の働き手であり、まさに平和を実現して神のもとへと帰っていったのです。

フランシスコが最初の弟子たちに勧めたように、現代のわたしたちにも次のように語りかけています。「平和について語るからには、何よりもまず心の中が平和でなくてはなりません。何人をも怒らせたり、憤慨させたりしてはなりません。むしろ、あなた方の優しさを通して人々を平和と善意へ、親切と一致へ引き寄せるようにしなさい。私たちは傷を癒し、引き裂かれたものを一つにし、道に迷ったものを家路に帰すために召し出されたのです」(三人の伴侶 58)。

フランシスコが平和の働き手であったことは、主が彼に教えてくださったあいさつ「主があなたに平和を与えてくださいますように」(遺言)からも明らかでしょう。神のみ手により造られたすべての人々と結ばれているという連帯感が平和のために働くフランシスコの努力を支えていました。謙遜であることが、兄弟たち相互の平和を推進し(一チェラノ 38)、すべての人に対し平和で優しくあろうと努める(同 41)原動力となっていました。フランシスコは兄弟たちが旅に出る時「争ったり、口論したり、他人を裁いたりせず、つねに柔和で平和を愛し、慎み深く、温和、謙遜であり、すべての人に対しては、修道者にふさわしく礼儀正しい言葉を用いて話すように」(非裁可会則 3 章)と勧めています。彼自身の説教は平和と救いを告げ知らせ、「以前にはキリストに逆らい、救いから遠く離れていた多くの人々をまことの平和のきずなによって」(大伝記 3:2)一致させるものでした。そして、まことの平和の働き手は「この世でどんなことを忍ぶにも、わたしたちの主イエス・キリストへの愛のために、心身の平和を保つ人である」(訓戒 15)と語ります。さらに、フランシスコは誠実さと「人は神のみ前にあるだけの者であって、それ以上の何ものでもない」(同 20)という信念によって平和をもたらす人でした。「平安と観想のあるところに、不安も放浪もない」(同 27)と確信していた彼は、すべての人のために天からのまことの平安を求めました。